福岡市埋蔵文化財調査報告書第1493集

YOSHI　ZUKA

吉塚14

－吉塚遺跡第17次調査報告－

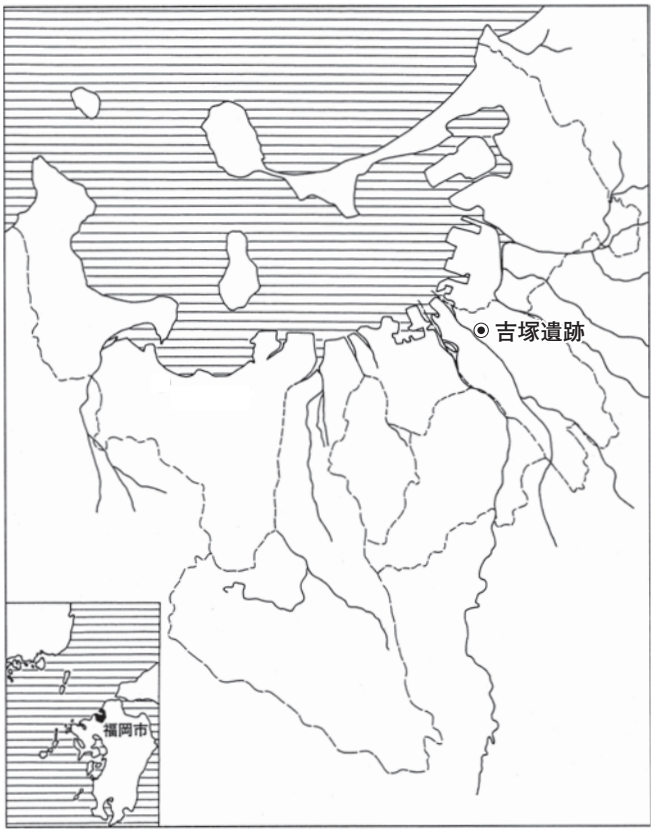
２０２３
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1493集

YOSHI　ZUKA

吉塚14

－吉塚遺跡第17次調査報告－



遺跡略号　ＹＳＺ－17

調査番号　２００７

２０２３

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は共同住宅建設に伴い、博多区堅粕４丁目地内で実施した吉塚遺跡第 17 次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、弥生時代中期の甕棺墓、井戸、溝、土坑、柱穴などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査委託者様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和５年３月 23 日

福岡市教育委員会
教育長　石 橋　正 信

例言

１．本書は共同住宅建設に伴い、福岡市博多区堅粕４丁目地内において実施した吉塚遺跡第 17 次調査の報告である。
２．検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
　甕棺墓　ＳＴ　　井戸　ＳＥ　　土坑　ＳＫ　　その他　ＳＸ　　ピット　ＳＰ
３．遺構の実測は木下博文が行った。
４．遺物の実測は山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
５．遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
６．製図は山崎龍雄が行った。
７．本書で使用した方位は磁北で、真北より６°　20′西偏する。
８．本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
９．本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号　２００７	遺跡略号　ＹＳＺ－17	分布地図番号　０３６　博多駅
所在地　博多区堅粕４丁目 345-1・2・3、388-2		調査面積　１６６．６㎡
調査期間　2020.5.11 ～ 2020.6.10		

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　１　調査に至る経緯…… 1
　２　調査体制…… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 1
第３章　調査の記録…… 5
　１　調査の概要…… 5
　２　遺構と遺物…… 5
　　甕棺墓…… 5
　　溝…… 6
　　井戸…… 9
　　土坑…… 9
　　落ち込み……12
　　包含層出土遺物……12
　３　まとめ……13
図版１～６…… 14 ～ 19

挿図目次

図１　遺跡の位置（Ｓ＝１／25000）…… 2
図２　調査地点位置図（Ｓ＝１／2000）…… 3
図３　調査区位置図（Ｓ＝１／300）…… 3
図４　調査区平面図（Ｓ＝１／100）…… 4
図５　ＳＴ 01・03・08・10 実測図（Ｓ＝１／20、１／８）…… 7
図６　ＳＴ 02・04 実測図（Ｓ＝１／20、１／10）…… 8
図７　ＳＤ 06、ＳＥ 05・07 および出土遺物実測図（Ｓ＝１／80、１／40、１／３）……10
図８　土坑実測図（Ｓ＝１／40）……11
図９　ＳＫ 11・15・19・23、ＳＸ 13 出土遺物実測図（Ｓ＝１／３、１／２）……12
図 10　包含層出土遺物実測図（Ｓ＝１／３、１／２）……13

図版目次

図版１　１区　全景（南東から）　ＳＴ 01・03（西から）　ＳＴ 02（南から）
　　ＳＴ 04（南から）　ＳＴ 10・ＳＸ 13 遺物出土状況（北西から）　ＳＴ 10（西から）
図版２　ＳＴ 10（西から）　ＳＴ 08（南西から）　ＳＤ 06（南東から）　ＳＥ 07（南から）
　　ＳＥ 05（南から）　ＳＫ 11（東から）　２区　全景（北西から）
　　ＳＫ 14・15（北西から）
図版３　ＳＫ 16（北西から）　ＳＫ 17（北西から）　ＳＫ 18（北西から）
　　ＳＫ 20（北東から）　ＳＫ 21（北東から）　ＳＫ 22（北西から）
　　ＳＫ 23（南東から）　ＳＫ 24（南東から）
図版４　出土遺物１
図版５　出土遺物２
図版６　出土遺物３

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和元（2019）年９月 24 日付で、個人より博多区堅粕４丁目 345-1、345-2、345-3、388-2 地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号　2019-2-677）。同地内は吉塚遺跡の範囲内であることから、令和２（2020）年２月６日に確認調査を実施し、地表面下 30 ｃｍで遺物包含層、50 ｃｍで遺構を確認した。

同地内では共同住宅建設が計画されており、その基礎工事内容は残存遺構に影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、令和２（2020）年５月 11 日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。５月 12 日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・写真撮影・実測を進め、令和２（2020）年６月 10 日に機材の撤収、調査区の埋め戻しを行い、終了した。

２　調査体制

調査委託　個人

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査　令和２年度　　資料整理　令和３・４年度）

調査総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長	菅波　正人（令和２～４年度）
	同課調査第１係長	吉武　学（令和２年度）
		本田　浩二郎（令和３・４年度）
庶務	文化財活用課管理調整係	松原　加奈枝（令和２年度）
		井手　瑞江（令和３年度）
		内藤　愛（令和３・４年度）
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長	本田　浩二郎（令和２年度）
		田上　勇一郎（令和３・４年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	田上　勇一郎（令和２年度）
		森本　幹彦（令和３・４年度）
	同課事前審査係	朝岡　俊也（令和元年度）
		山本　晃平（令和２・３年度）
		三浦　悠葵（令和４年度）
調査担当	埋蔵文化財課調査第１係	木下　博文

第２章　遺跡の立地と環境

吉塚遺跡は、御笠川の右岸、博多湾岸に並ぶ砂丘群の一画に立地する。現在の福岡市博多区堅粕４・５丁目および吉塚３丁目一帯に広がる。現地表面の標高は３～４ｍである。遺跡の北西側に南から堅粕、吉塚祝町、吉塚本町の各遺跡が並び、御笠川を挟んで西に博多遺跡群が立地する。

吉塚祝町遺跡１次調査では、最古の遺構として弥生時代中期中葉の小児棺からなる甕棺墓群が確認されており、それに関わる集落域の特定が望まれている。

堅粕遺跡８次調査では、古墳時代前期の祭祀遺構が確認されている。土師器壺に滑石製臼玉・管玉

が綴られた状態で入れられており、壺の周囲からも剣形石製品や多数の玉が出土している。

吉塚遺跡内では、過去に 16 次の調査が実施されており、地点は北東端部、中央部、南西端部に集中している。今回の調査地点は中央部のやや南西寄りに位置し、西に２・３・16 次、北西に４次の各調査地点が位置する。

南西部の御笠川に近い１次調査では、古墳時代前期の土器群を検出、中国・新の貨泉や銅鏃が出土している。滑石製臼玉 25 点が入った須恵器壺など古墳時代後期の遺構・遺物も注目に値する。

２次調査では、古墳時代後期の遺構が多く検出されている。特に注目される遺物としては須恵器の形態・製作技法を模倣した土師器が多量に出土している。このような「赤焼土器」は玄海灘沿岸地域を中心に出土し、埋葬・祭祀遺構から出土することが多いとされている。

３次調査では、古代・中世前半の遺構が主体となっている。

４次調査では、弥生時代後期と中世前半の遺構が主として確認され、古墳時代前期の遺構・遺物、庄内・布留式系土器がほとんど見られないことが明らかになっている。

16 次調査では、古墳時代前期の井戸・完形土器群、同後期の掘立柱建物、中世の井戸などを検出した。

１次　『吉塚１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 202 集　1989
２次　『吉塚２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 464 集　1996
３次　『吉塚３』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 553 集　1998
４次　『吉塚４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 552 集　1998
16 次　『吉塚 13』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1492 集　2023

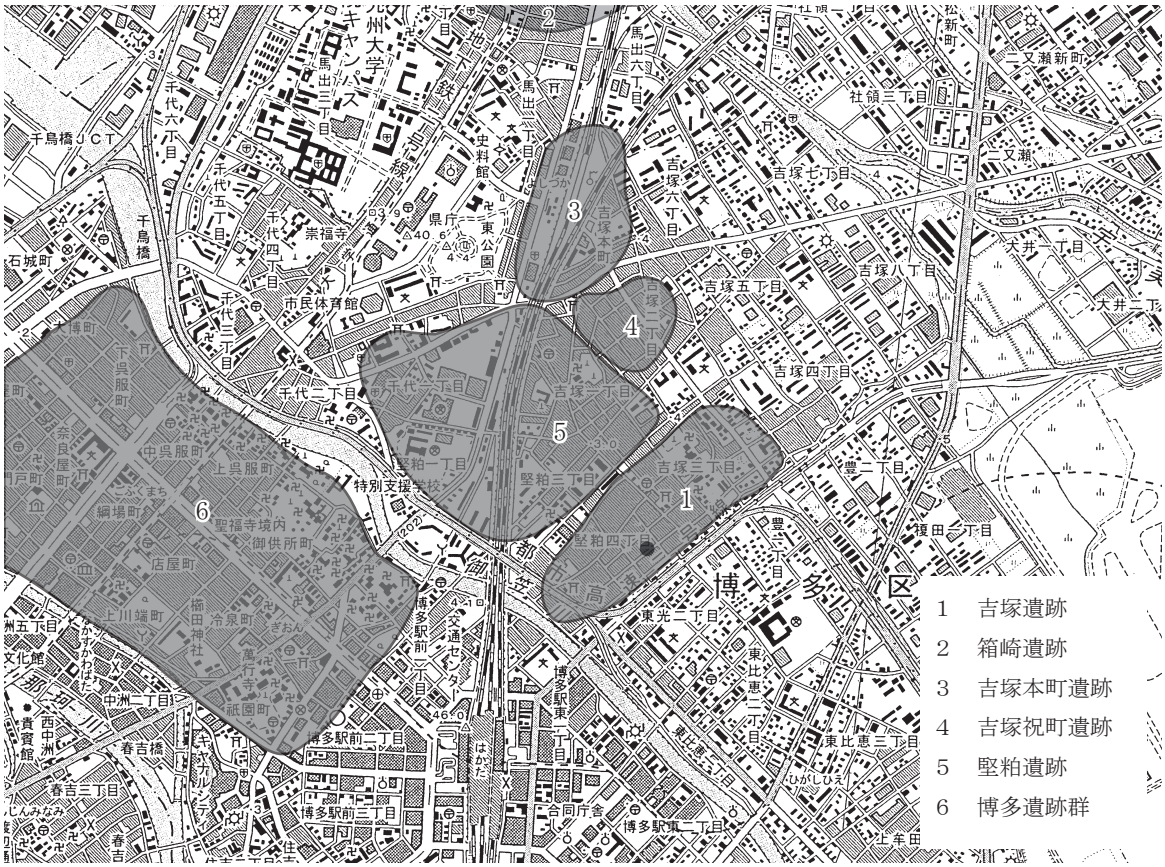


図１　遺跡の位置（Ｓ＝１／ 25000）

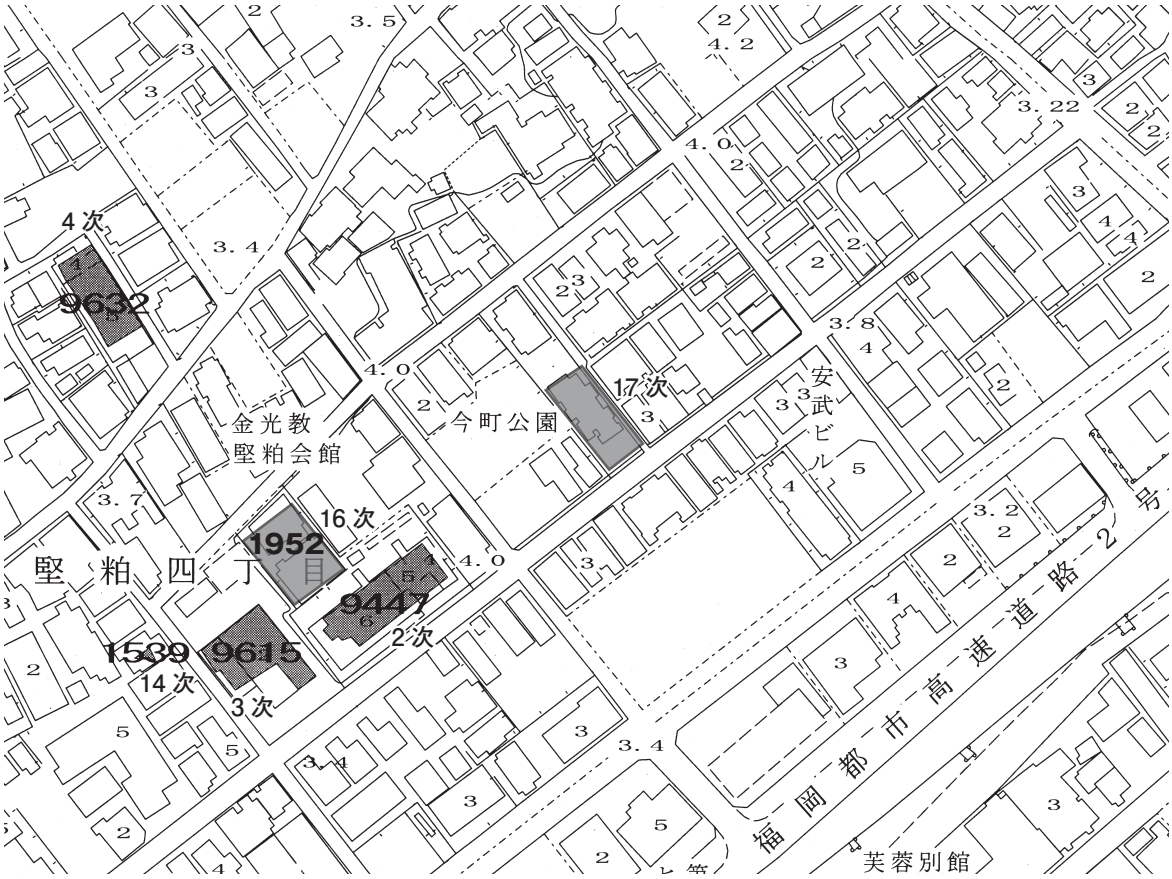


図２　調査地点位置図（Ｓ＝１／2000）

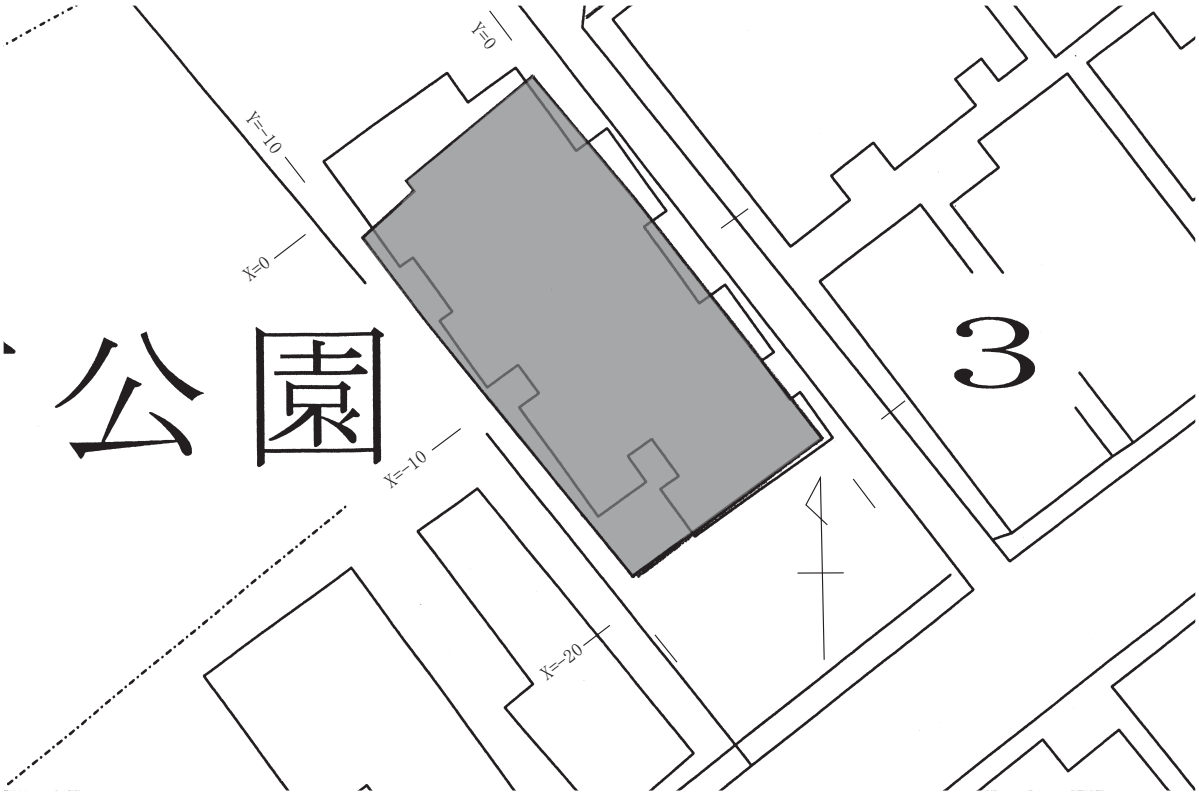
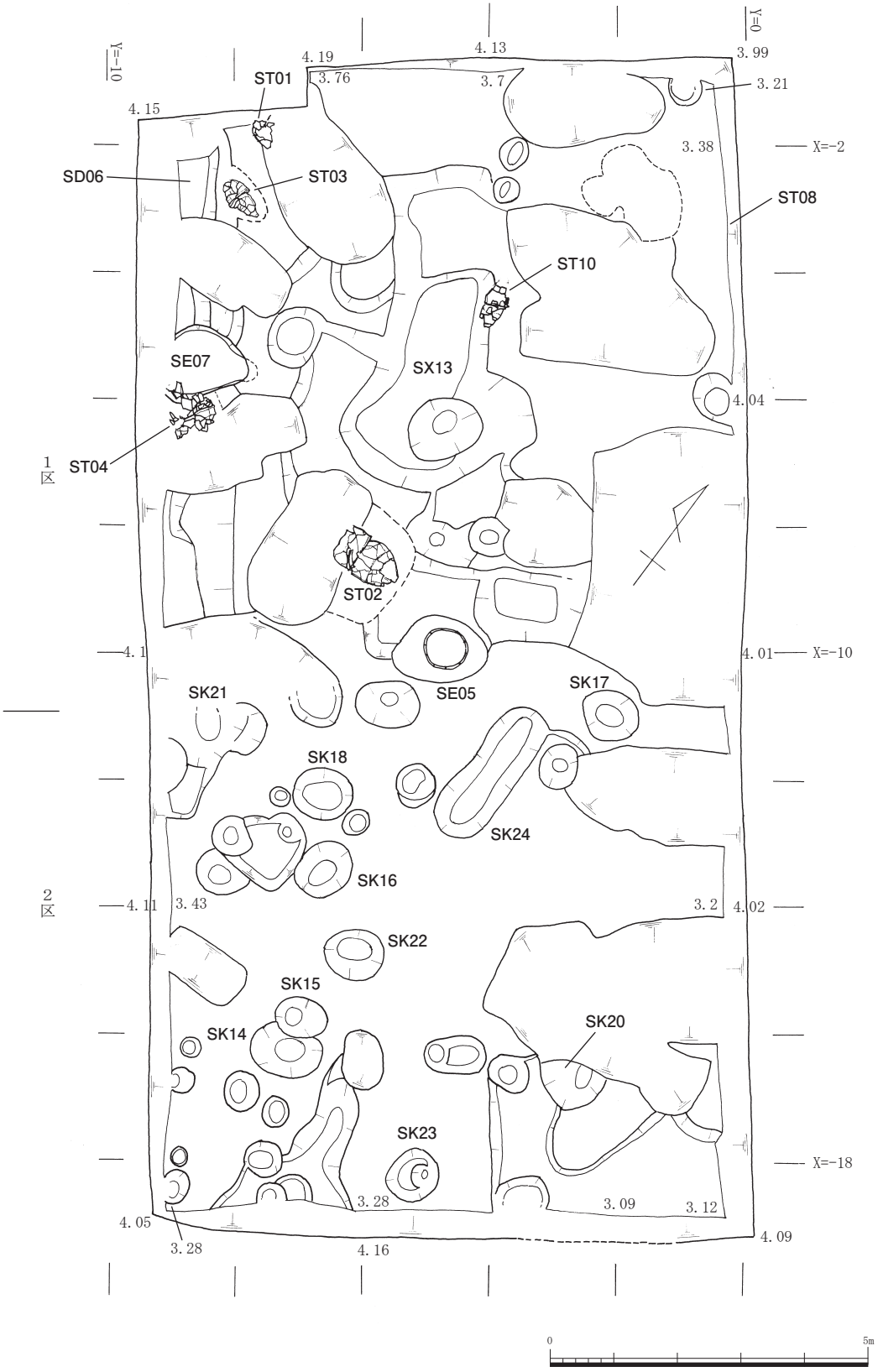


図３　調査区位置図（Ｓ＝１／300）



小数点数字は標高

図４　調査区平面図（Ｓ＝１／100）

第３章　調査の記録

１　調査の概要

本調査地点は、遺跡の中央部やや南西寄りに位置し、現地表面の標高は４ｍである。排土処理のため、２区画に分け調査した。調査区の北半を１区、南半を２区とし、1区より着手した。

土層は試掘調査の所見によると、現地表面下 30 ｃｍまで建物解体時の廃棄物を含む現代客土、一部厚さ 20 ｃｍの茶褐色砂（遺物包含層）を挟み、地山の黄褐色細砂となっている。

遺構検出は、地山の黄褐色砂丘面上面で行った。現地表面からの深さは１区北端で 40 ～ 50 ｃｍ、２区南端で 90 ｃｍを測ることから、砂丘面は北から南へわずかに傾斜する傾向がうかがえる。

検出遺構は１区では南北方向の溝１、中世～近世の井戸のほか、弥生時代中期前半～中葉の甕棺墓を検出した。甕棺墓は成人棺２基、小児棺４基からなる。また調査区中央に落ち込みがあり、弥生時代中期～後期の土器を主体に、特筆すべきものとして鉄製刃先が出土している。

６月に入ってから２区の調査に着手したが、１区とは様相が変わり、甕棺墓をはじめ弥生時代の遺構・遺物は出土せず、土坑とピット主体で古墳時代後期の須恵器片が目立った。出土遺物量も総量コンテナ 24 箱分のうち、２区は１箱のみで、遺物の出土量・時期に明瞭な差異が認められる。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

２　遺構と遺物

甕棺墓

ＳＴ０１（図５、図版１）

１区北端で検出。攪乱により大部分が破損、失われている。埋葬主軸は磁北より 86°西偏する。他の検出例から、同形同大の日常用甕を２個体転用した合口式の小児棺とみられる。弥生時代中期中葉に位置づけられる。

出土遺物（図５、図版４）

１は弥生土器の甕。復元口径 39.6 ｃｍ、器高 47.9 ｃｍ。外面はにぶい橙色を呈し、縦方向のハケ目を施す。胴部外面上半に煤が付着する。

ＳＴ０２（図６、図版１）

１区中央南寄りで検出。同形同大の甕を使用した合口式の成人棺である。全体の残存長 107 ｃｍ。埋葬主軸は磁北より 93°西偏で、磁北に対しほぼ直交している。掘形は全く不明である。西側の棺は攪乱により半分失われている。棺の埋置レベルは西側が東側よりやや低く、西側が下甕、東側が上甕で、棺の挿入方向は東から西とみられる。副葬品・遺体は残存していなかった。甕棺の型式はⅡｂ式、汲田式に相当し、弥生時代中期前半に位置づけられる。

出土遺物（図６、図版５）

８は西側の棺。口径 56.0 ｃｍ、残存高 57.0 ｃｍ。内面は黄橙色、外面は橙色を呈し、全体なで調整。９は東側の棺。口径 50.0 ｃｍ、器高 74.5 ｃｍ。外面はにぶい褐色を呈し、なで調整であるが、下３分の１にハケ目の後なで消しの痕跡がある。

ＳＴ０３（図５、図版１）

ＳＴ０１の南側直近で検出。同形同大の日常用甕を２個体転用した合口式の小児棺である。ＳＤ０６に切られる。全体の残存長 70 ｃｍ。埋葬主軸は磁北より 80°西偏する。棺の埋置レベルは西側が東側よりやや低く、西側が下甕、東側が上甕で、棺の挿入方向は東から西とみられる。甕棺の型式

は須玖式に相当し、弥生時代中期中葉に位置づけられる。
出土遺物（図５、図版１）
２は東側の棺。口径 28.1 ｃｍ、器高 35.9 ｃｍ。外面は浅黄橙色を呈し、縦方向のハケ目を施す。３は西側の棺。口径 33.2 ｃｍ、器高 42.3 ｃｍ。外面は浅黄橙色を呈し、縦方向のハケ目を施す。
ＳＴ０４（図６、図版１）
１区西壁際で検出。同形同大の甕を使用した合口式の成人棺である。ＳＤ 06 に切られる。甕の大半はＳＥ 07 と攪乱により破損・失われており、わずかに甕の合口部が残るのみである。埋葬主軸は磁北より 58.5° 西偏で、棺のレベルは水平である。甕棺の型式はⅡｂ式、汲田式に相当し、弥生時代中期前半に位置づけられる。
出土遺物（図６、図版５）
10 は南側の棺。口径 64 ｃｍ、残存高 28 ｃｍ。外面は浅黄橙色を呈し、全体なで調整。11 は北側の棺。口径 68.0 ｃｍ、残存高 66.0 ｃｍ。外面は淡赤橙色を呈し、全体なで調整。内外面に黒い部分が多く黒色顔料の塗布の可能性がある。
ＳＴ０８（図４、図版２）
１区東壁際で検出。遺物包含層掘り下げ時に取り上げてしまったが、砂丘面直上でまとまった形であったこと、直近の東壁内に別個体の甕口縁部が残存していることが確認できた。よって同形同大の日常用甕を２個体転用した合口式の小児棺とみられる。直上まで攪乱層に覆われている。棺の埋置レベルは水平である。甕棺の型式は須玖式に相当し、弥生時代中期中葉に位置づけられる。
出土遺物（図５、図版４）
４・５は弥生土器の甕。４は復元口径 36.2 ｃｍ、残存高 26 ｃｍ。外面は浅黄橙色を呈し、煤が付着、縦方向のハケ目を施す。調査区東壁内で出土。５は口径 38.2 ｃｍ、残存高 34.5 ｃｍ。外面は浅黄橙色を呈し、縦方向のハケ目を施す。調査区内で出土。
ＳＴ１０（図５、図版１・２）
１区中央北寄りで検出。同形同大の日常用甕を２個体転用した合口式の小児棺である。全体の残存長 70 ｃｍ。埋葬主軸は磁北より 18.5° 西偏する。掘形は全く不明である。ＳＸ 13 の掘り下げ途中で検出しており、棺の埋置レベルはＳＸ 13 底よりやや浮き、水平である。甕棺の型式は須玖式に相当し、弥生時代中期中葉に位置づけられる。
出土遺物（図５、図版４）
６は南側の棺。口径 28.8 ｃｍ、器高 37.0 ｃｍ。外面は橙色を呈し、縦方向のハケ目を施す。口縁部端面に籾痕らしきものが残存する。７は北側の棺。口径 34.8 ｃｍ、残存高 40.2 ｃｍ。外面はにぶい黄橙色を呈し、縦方向のハケ目を施す。

溝
ＳＤ０６（図７、図版２）
１区西壁際で検出。ＳＴ 03･04 を切り、ＳＥ 07 に切られる。南北方向で検出長 7.6 ｍ、幅 1.1 ｍ以上、深さは北端で 0.6 ｍ、南端で 0.3 ｍ。南端は攪乱により不明で、２区のＳＫ 21 と接続する可能性も考えられたが、ＳＫ 21 は埋土が暗茶褐色砂でＳＤ 06 とは異なることから、別の遺構と判断した。
出土遺物（図７、図版６）
12 は須恵器蓋。復元口径 20.6 ｃｍ。13 は須恵器蓋。口径 11.4 ｃｍ、天井部にヘラ記号がある。14 は土師器鉢。復元口径 12.0 ｃｍ、にぶい褐色を呈す。15 は瓦質土器羽釜。

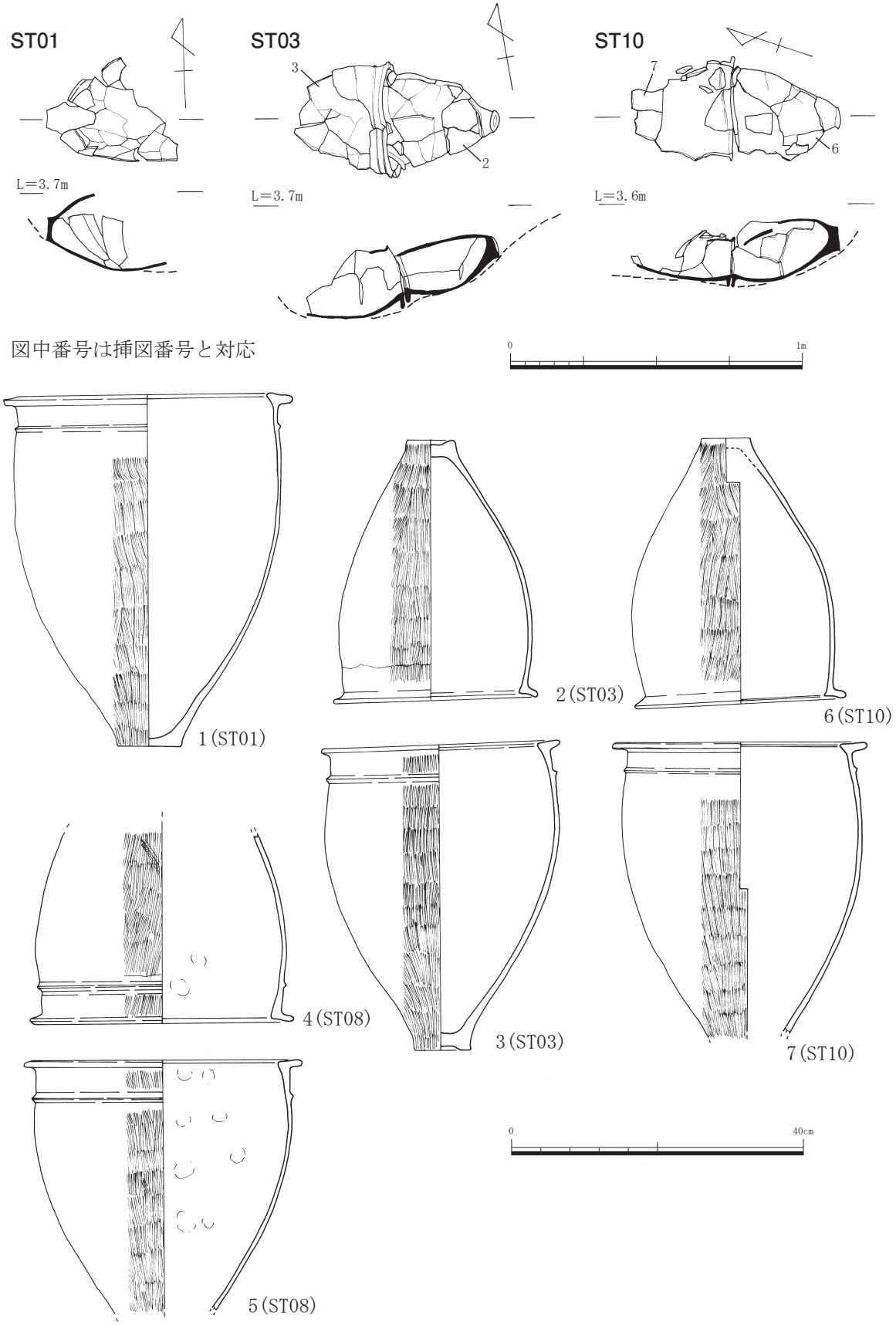


図５　ＳＴ 01・03・08・10 実測図（Ｓ＝１／20、１／８）

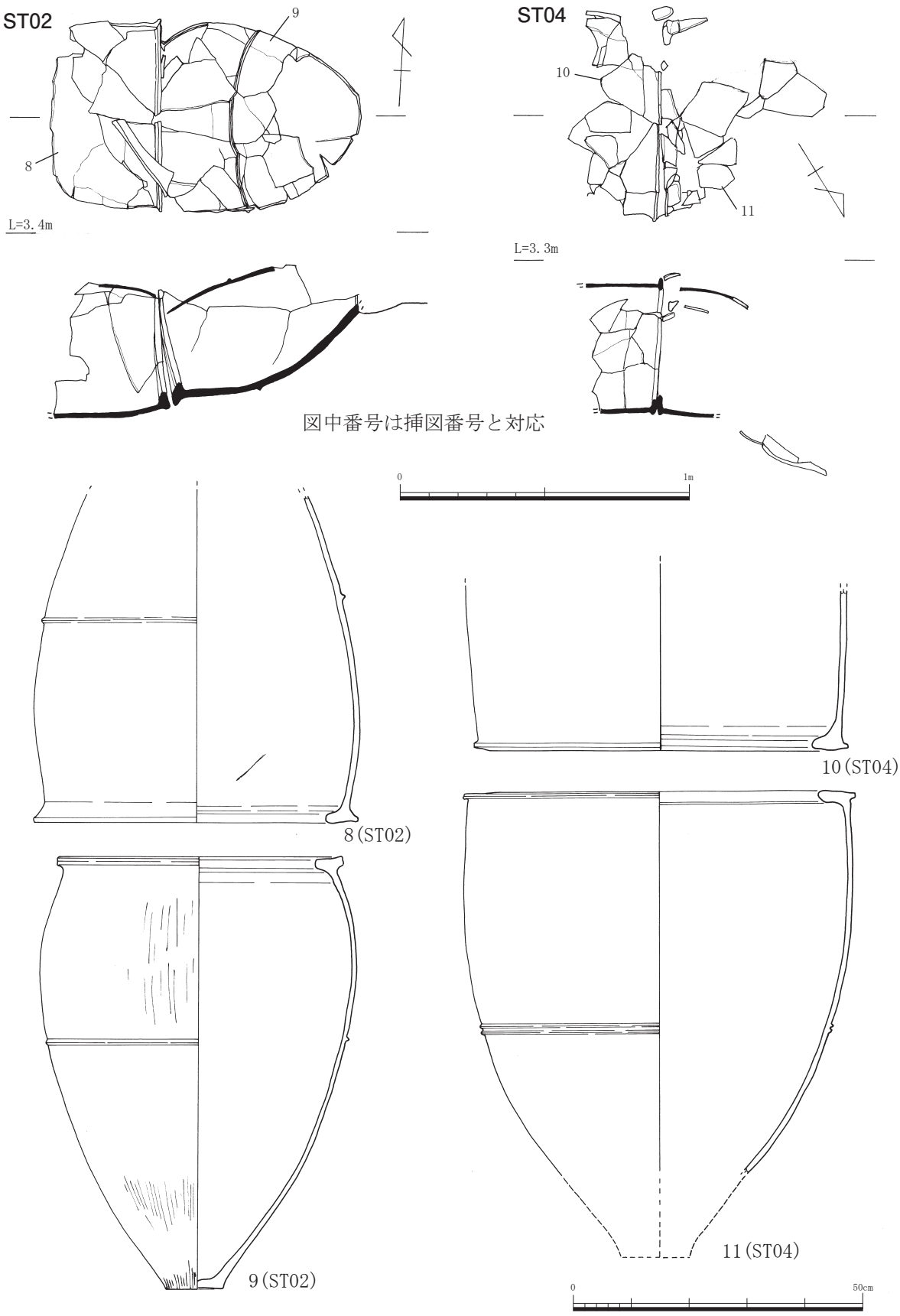


図６　ＳＴ 02・04 実測図（Ｓ＝１／ 20、１／ 10）

井戸

ＳＥ０５（図７、図版２）

１区南端で検出した。近世の瓦組井戸である。10 枚の瓦で内法径 0.65 ｍの井戸側を設ける。掘形は短軸 1.05 ×長軸 1.5 ｍの不整楕円形で、深さは 0.7 ｍまで確認し、完掘していない。

ＳＥ０７（図７、図版２）

１区西壁際で検出した。ＳＤ 06、ＳＴ 04 を切る。掘形は短軸 1.1 ×長軸 1.4 ｍの不整楕円形で、深さ 1.0 ｍ。井戸側材は残存していなかったが、検出面で円形プランが見られたことから、井戸として報告する。

土坑

ＳＫ１１（図４、図版２）

１区で検出。径 0.6 ｍの円形で、深さ 0.2 ｍ弱。

出土遺物（図７、図版６）

16 は不明鉄製品。最大長 7.3 ｃｍ、最大幅 2.2 ｃｍ、厚さ 0.5 ｃｍ。

ＳＫ１４（図８、図版２）

２区で検出。ＳＫ 15 に切られる。短軸 0.9 ×長軸 1.1 ｍの楕円形で、深さ 0.4 ｍ。

ＳＫ１５（図８、図版３）

２区で検出。ＳＫ 14 を切る。短軸 0.6 ×長軸 0.85 ｍの楕円形で、深さ 0.55 ｍ。

出土遺物（図９、図版６）

17 は土師器甑の把手。橙色を呈す。18 は赤焼須恵器の壺。口径 24.6 ｃｍ。

ＳＫ１６（図８、図版３）

２区、ＳＫ 18 の南東で検出。径 0.8 ～ 0.95 ｍの円形で、深さ 0.4 ｍ。

ＳＫ１７（図８、図版３）

２区北東部で検出。径 0.8 ｍの円形で、深さ 0.4 ｍ弱。

ＳＫ１８（図８、図版３）

２区、ＳＫ 19 の南で検出。径 0.85 ～ 0.95 ｍの円形で、深さ 0.5 ｍ弱。

ＳＫ１９（図８、図版３）

２区、ＳＥ 05 の南で検出。短軸 0.7 ×長軸 0.95 ｍの楕円形で、深さ 0.4 ｍ。

出土遺物（図９、図版６）

19 は緑釉陶器の椀。復元底径 8.8 ｃｍ。

ＳＫ２０（図８、図版３）

２区で検出。北半を攪乱に切られる。短軸 1.1 ×長軸 0.75 ｍ以上の楕円形で、深さ 0.3 ｍ。

ＳＫ２１（図８、図版３）

２区北西隅で検出。２段掘りを呈し、深さ 0.7 ｍ余。埋土の違いからＳＤ 06 とは別の遺構と判断した。

ＳＫ２２（図８、図版３）

２区、ＳＫ 15 の北で検出。径 0.8 ～ 0.95 ｍの円形で、深さ 0.7 ｍ弱。

ＳＫ２３（図８、図版３）

２区南端中央で検出。径 0.8 ～ 0.85 ｍの円形で、深さ 0.4 ｍ。

出土遺物（図９、図版６）

20 は土師器甑の把手。にぶい黄褐色を呈す。

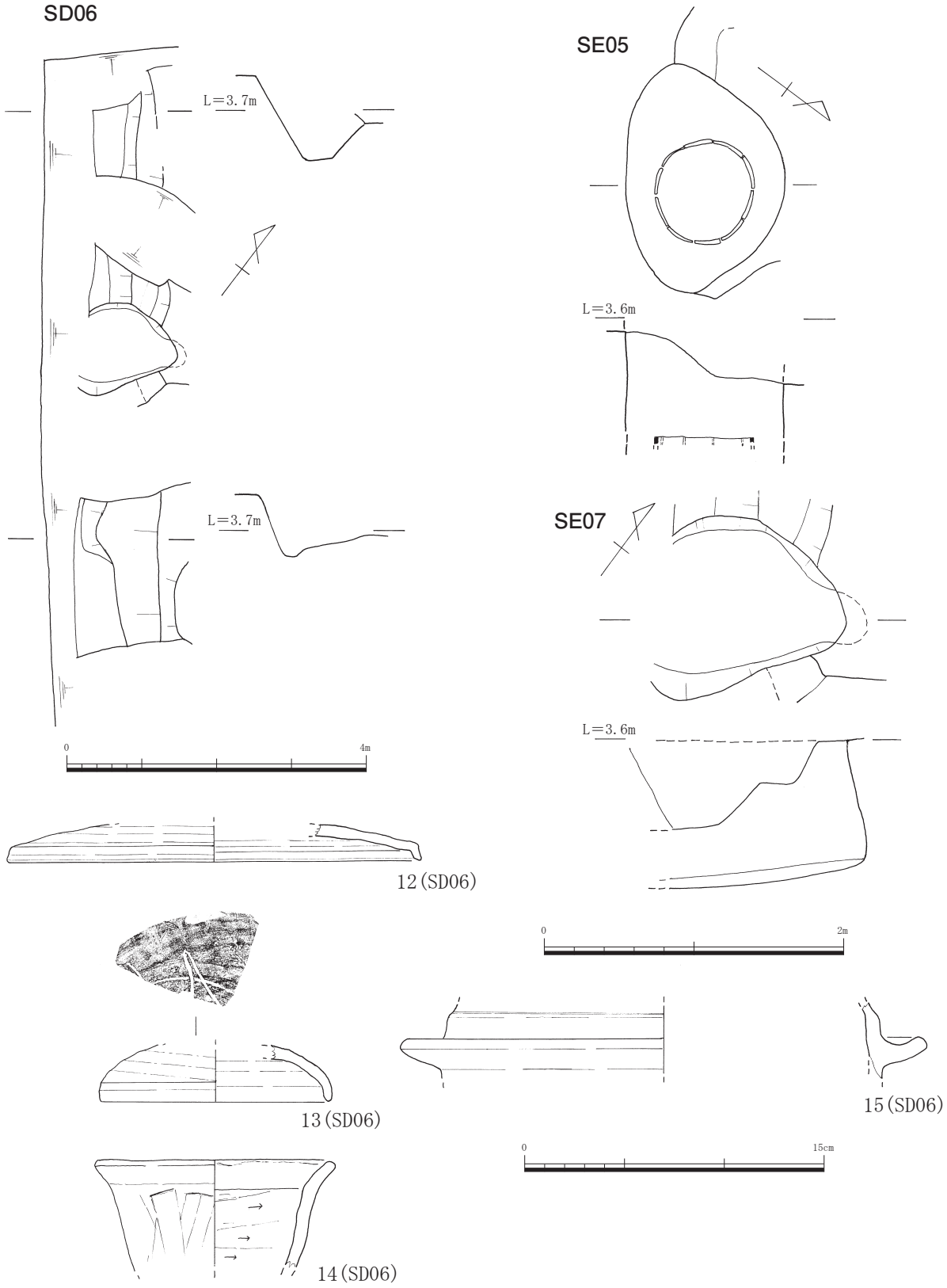


図７　ＳＤ 06、ＳＥ 05・07 および出土遺物実測図（Ｓ＝１／ 80、１／ 40、１／３）

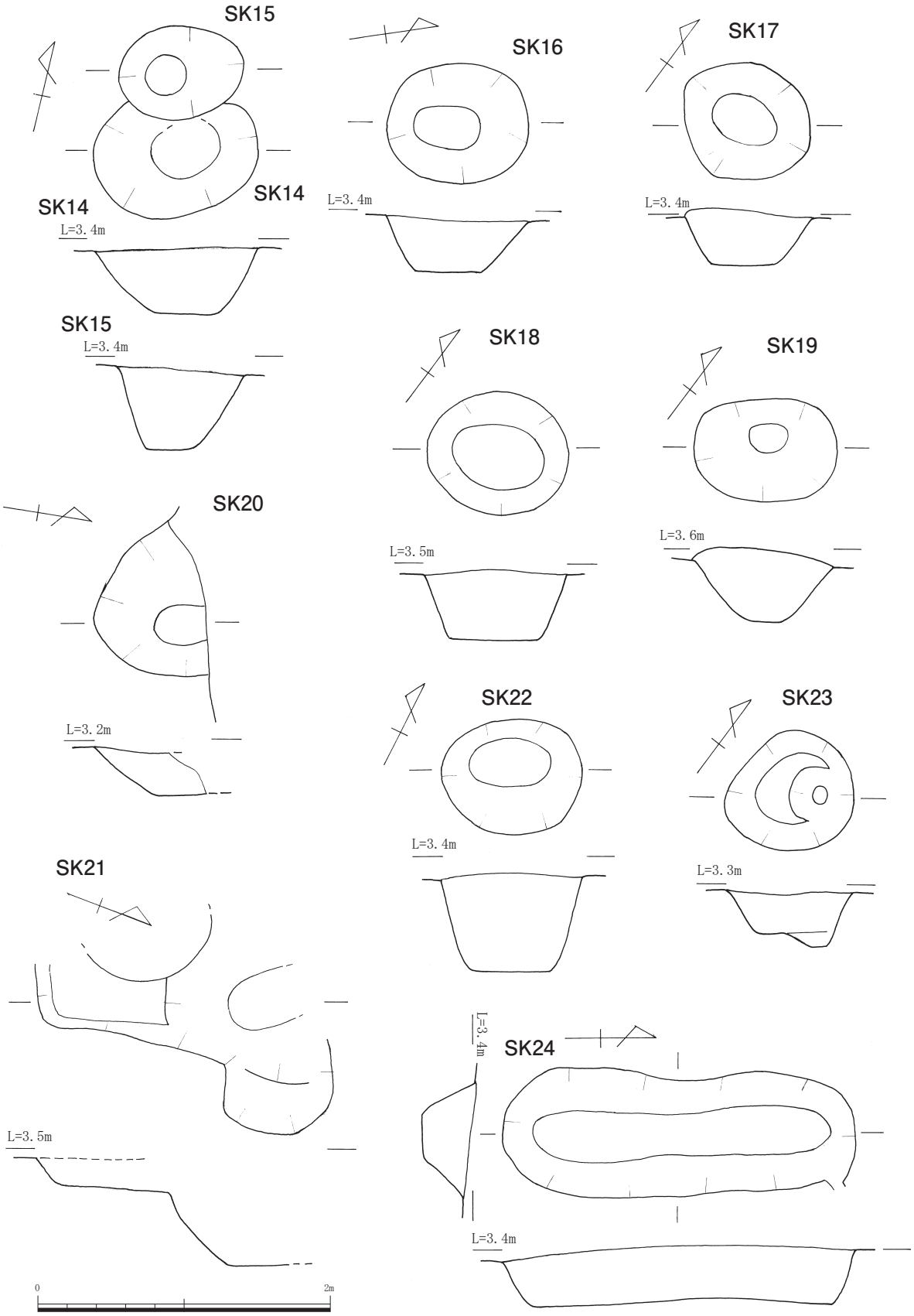


図８　土坑実測図（Ｓ＝１／40）

ＳＫ２４（図８、図版３）

２区、ＳＫ 17 の南西で検出。短軸 0.8 ×長軸 2.4 ｍの長楕円形で、深さ 0.4 ｍ。

落ち込み

ＳＸ１３（図４、図版１）

１区中央で検出。深さ 0.3 ～ 0.8 ｍ、埋土は暗茶褐色砂で甕の口縁部・胴部・底部片など弥生時代中期～後期までの遺物を多量に含んでいる。この落ち込みが埋まる過程でＳＴ 10 が営まれている。砂丘頂部の窪地に遺物が投棄されたものか。

出土遺物（図９、図版６）

21 は鍬または鋤用の鉄製鍛造刃先。横幅 10.9 ｃｍ、縦長 6.7 ｃｍで両端を折り曲げている。

包含層出土遺物（図 10、図版６）

22 は土製品で鈴もしくは馬鐸か。径 6.1 ｃｍ、にぶい黄橙色を呈し、外面に線刻がある。23 は古式土師器の丸底壺。口径 9.8 ｃｍ、器高 11.6 ｃｍ、浅黄橙色を呈し、口頸部内外面に縦方向、胴部外面に横方向のヘラミガキ、底部外面は不定方向のハケ目を施す。口頸部と胴部の継ぎ目内外面に細かいハケ目痕が残る。口頸部と胴部上半にかけて赤色顔料の塗布か。底部に黒斑がある。24 は鉢。口径 21.6 ｃｍ、灰黄褐色を呈し、内外面にハケ目を施す。25 は弥生土器の壺。復元口径 10.3 ｃｍ、残存高 9.7 ｃｍ、浅黄橙色を呈し、体部内外面にハケ目を施す。26 は弥生土器の器台。残存高 11.6 ｃｍ、橙色を呈し、内外面にハケ目を施す。

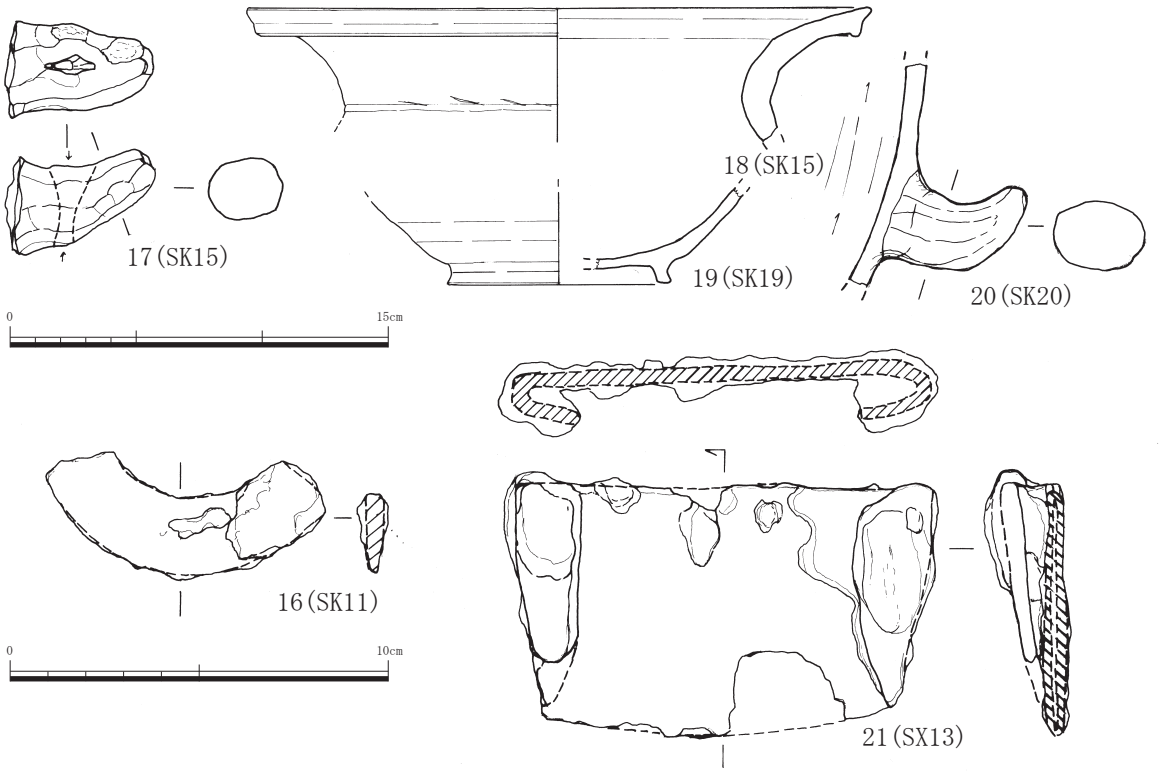


図９　ＳＫ 11・15・19・23、ＳＸ 13 出土遺物実測図（Ｓ＝１／３、１／２）

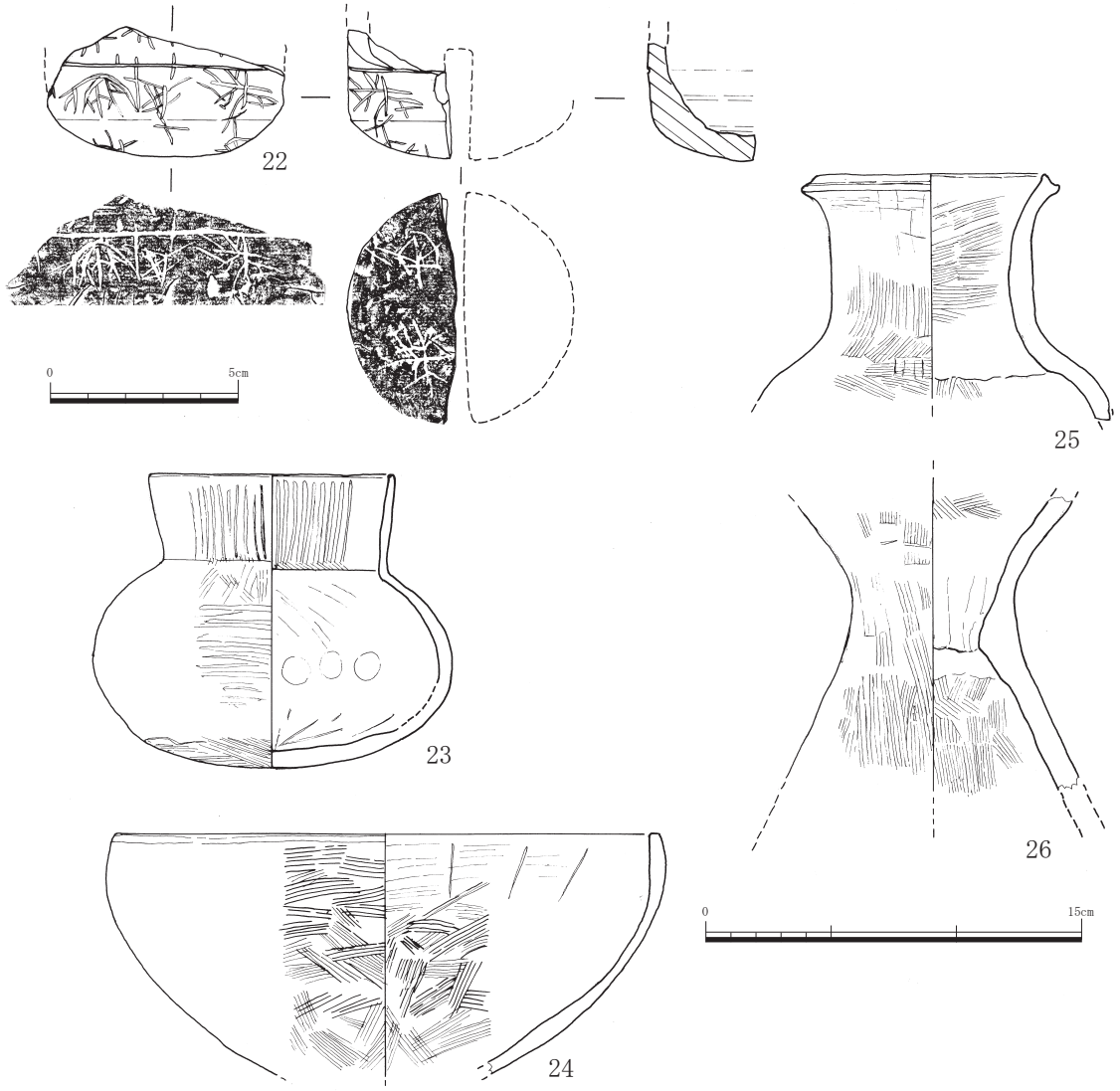


図 10　包含層出土遺物実測図（S＝1／3、1／2）

3　まとめ

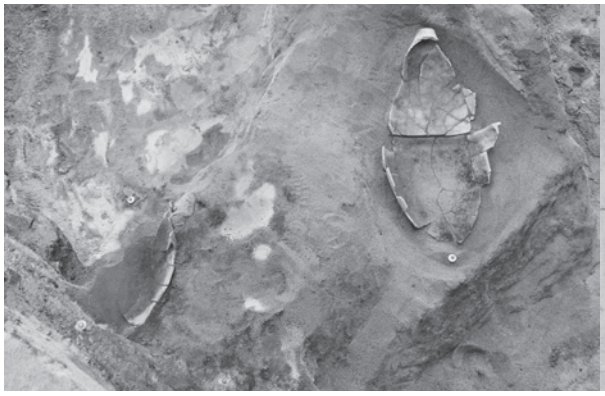
今回検出した最古の遺構は、弥生時代中期前半～中葉の甕棺墓群で、汲田式成人棺２と須玖式小児棺４からなる。吉塚遺跡内では、東寄りで確認調査の際に弥生時代中期初頭の金海式甕棺が確認されているが、本調査における確認は今回が初である。砂丘面の標高は１区北端で3.8ｍ、２区南端では3.4ｍで、約 40 ｃｍの比高差があり、区境が砂丘面の傾斜変換点に当たる。甕棺墓は１区、砂丘面の高い方にしかなかった。吉塚遺跡内の甕棺墓の分布範囲は現標高４ｍを測る最高部に絞られる可能性があるのではないかと考える。甕棺墓の検出にあたっては、今回は攪乱が及んでいたことから、幸い気が付くことができたが、砂丘面上での墓壙プランの検出は極めて困難である。今後この地区内で、茶褐色砂の遺物包含層が残存し、弥生時代中期の甕口縁部や平底片が少しでも出土する場合は、注意を要する。近隣では吉塚遺跡の北側に位置する吉塚祝町遺跡１次調査の第 14・16 区で、同時期の小児用甕棺墓が検出されており、この地域における弥生時代中期の集落・墓地の分布を考える上で注目に値する。２区では円形土坑が主体で、出土遺物量も極めて少ない。遺物の時期も古墳時代後期の須恵器などが目につき、弥生時代の遺物は見られなくなり、様相が全く変わる。

今後は周辺の調査によって、甕棺墓域の範囲およびそれに隣接する集落域の特定が待たれる。

図版１

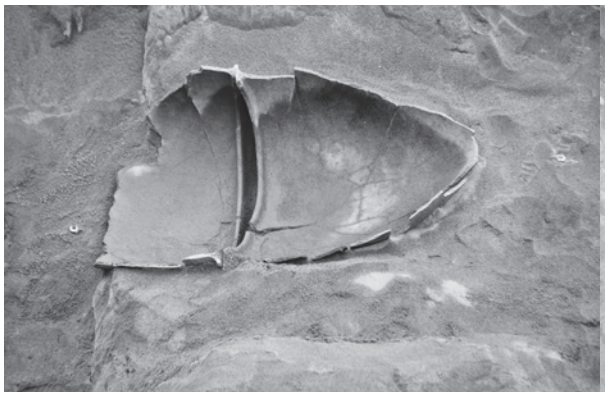
１区　全景（南東から）

ＳＴ 01・03（西から）



ＳＴ 01・03（西から）

ＳＴ 02（南から）

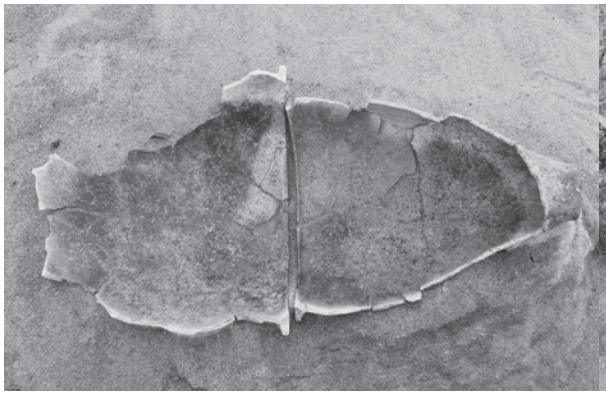


ＳＴ 02（南から）

ＳＴ 04（南から）

ＳＴ 10・ＳＸ 13 遺物出土状況（北西から）

ＳＴ 10（西から）



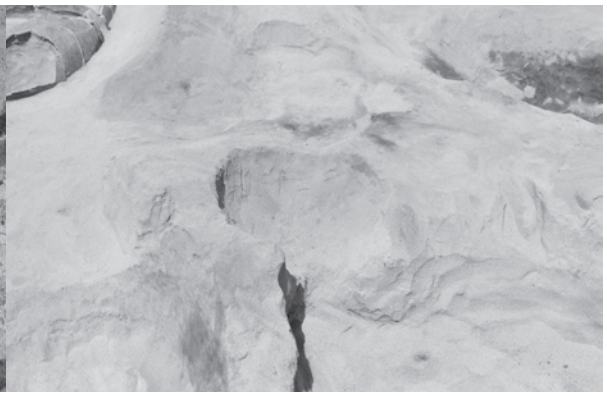
ＳＴ 10（西から）

ＳＴ 08（南西から）

ＳＤ 06（南東から）

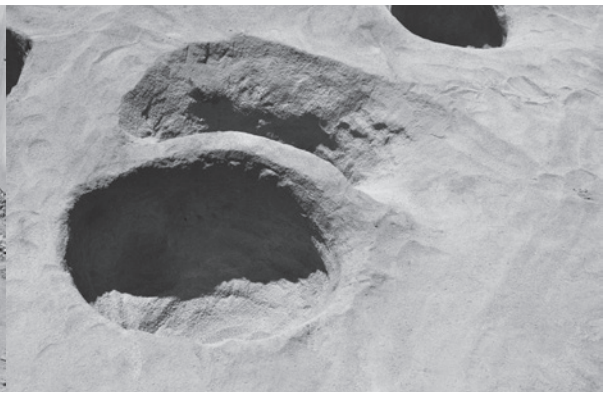
ＳＥ 07（南から）

ＳＥ 05（南から）



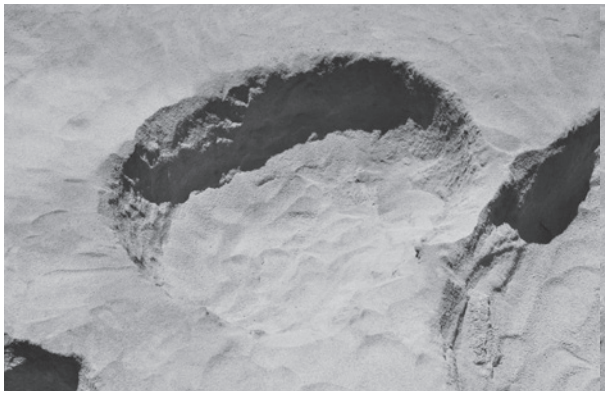
ＳＫ 11（東から）

２区　全景（北西から）

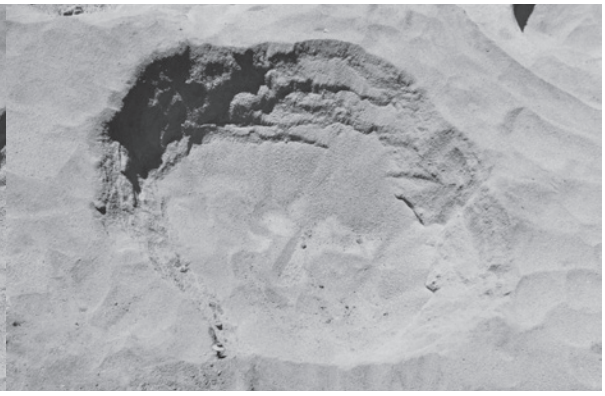


ＳＫ 14・15（北西から）

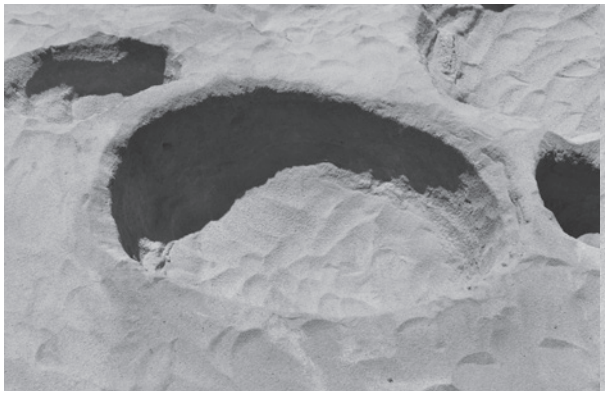
図版３



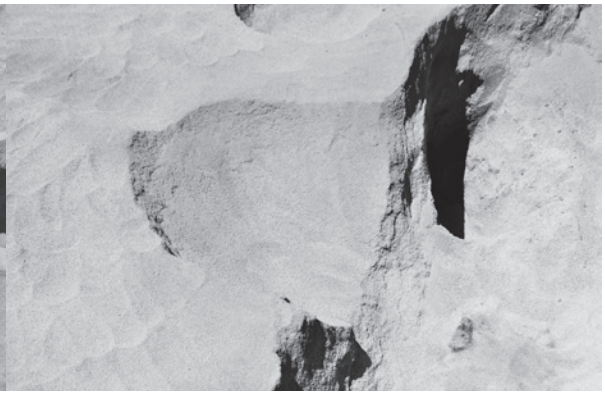
ＳＫ 16（北西から）



ＳＫ 17（北西から）

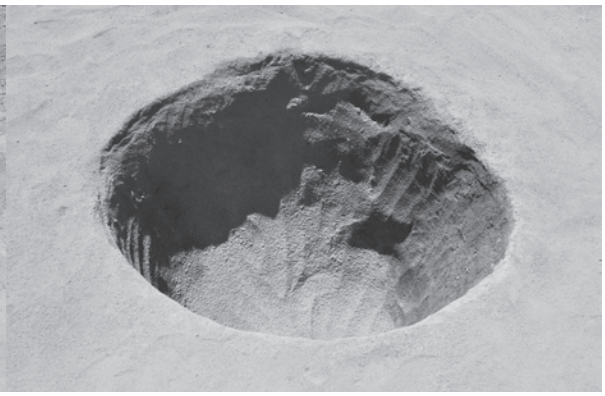


ＳＫ 18（北西から）

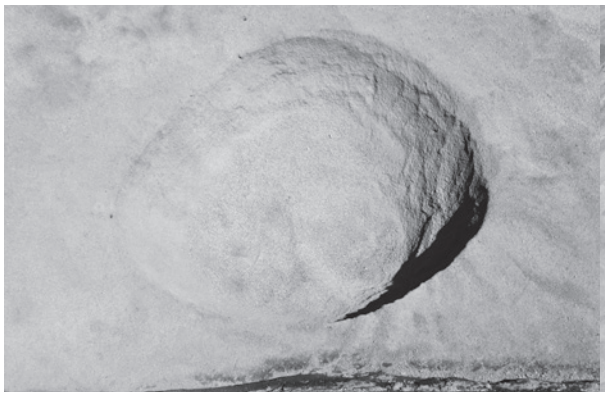


ＳＫ 20（北東から）

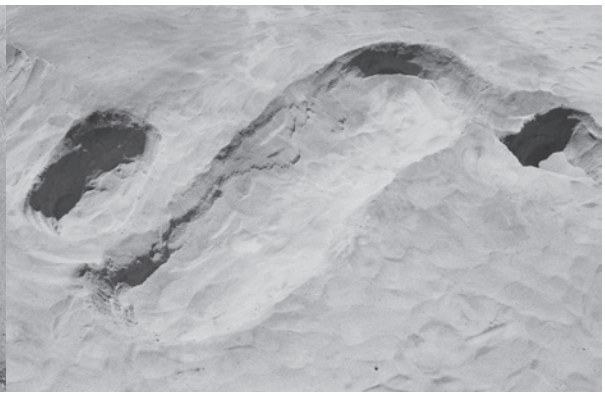
ＳＫ 21（北東から）



ＳＫ 22（北西から）



ＳＫ 23（南東から）



ＳＫ 24（南東から）

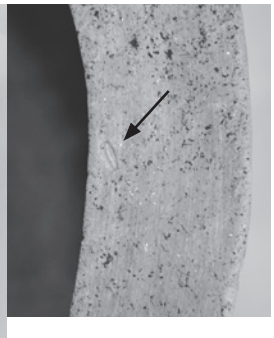
1

2

3

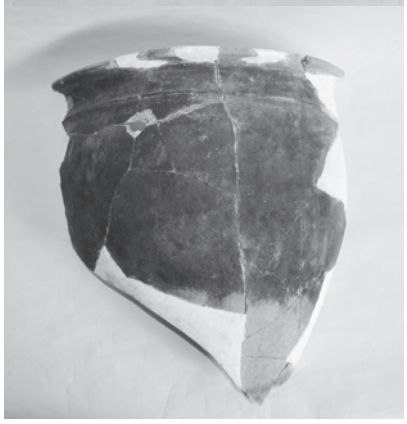
6

7



籾痕

4



5

出土遺物１

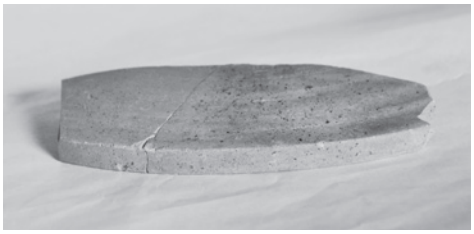
図版５

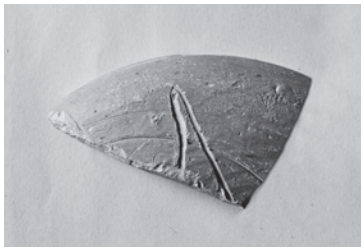
8

10

9

11

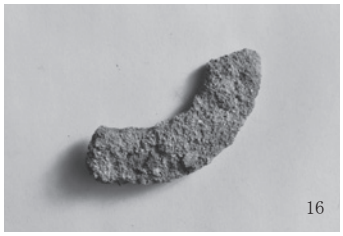

12


13

14

15

出土遺物２


16

17

18

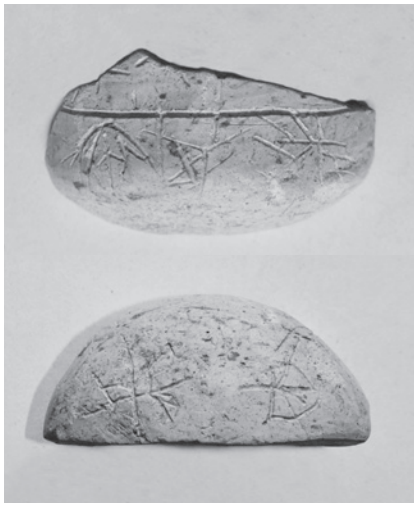
20

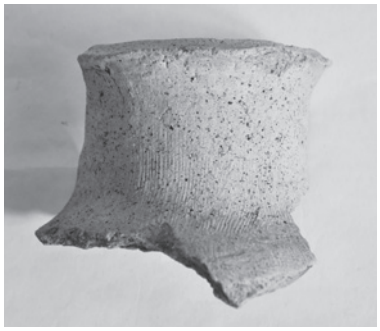
19

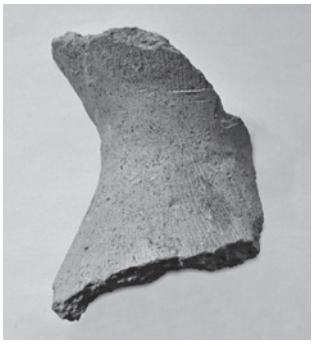
21

23

24


22


25


26

出土遺物３

報告書抄録

ふりがな	よしづか
書名	吉塚14
副書名	吉塚遺跡第17次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第1493集
編著者名	木下博文
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	2023年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
よしづかいせき 吉塚遺跡 第17次	ふくおかしはかたくかたかす 福岡市博多区堅粕 4丁目345-1・2・3、 388-2	40132	0123	33度35分 46.59秒	130度25分 34.14秒	20200511 ～ 20200610	166.60	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉塚遺跡	集落跡	弥生～古墳	甕棺墓、溝、井戸、 土坑、ピット	弥生土器、土師器、 須恵器、鉄器	本遺跡内では初の 弥生甕棺墓を検出

要約	吉塚遺跡は、御笠川の東岸、博多湾岸に並ぶ砂丘群の一画に立地する弥生時代から中世の集落跡で、標高４ｍ前後に当たる。今回の調査地点は遺跡中央部のやや南西寄りに位置し、近隣では弥生時代から中世までの建物・土坑・溝・井戸などの遺構が確認されている。今回の調査では、溝・井戸・土坑・ピットの他、弥生時代中期前半～中葉の甕棺墓６基を検出した。甕棺墓は成人棺２基、小児棺４基からなり、吉塚遺跡内では初の調査事例となる。

吉塚 14

－吉塚遺跡第 17 次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1493 集
2023（令和５）年３月 23 日

発　行　福岡市教育委員会
〒 810-8621　福岡市中央区天神１- ８- １

印　刷　エース印刷株式会社
〒 810-0052　福岡市中央区大濠１- ６- ９

吉塚14

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一四九三集

2023

福岡市教育委員会